

圖 版 解 說

三、如拙筆瓢鮎圖

京都退藏院藏

四、溪陰小築圖

京都金地院藏

七、探幽縮圖卷

東京平福百穂氏藏

一、二、日本僧歸朝送別圖

東京子爵鳥尾敬光氏舊藏

我國の詩畫軸に送行を動機とせる場合は尠くない。宋詩のうちでも送別圖に題したものに餞として用ひられ、或は送別圖として錄されてゐるものに同時に繪を伴つてゐた場合は多かつたことと思ふ。この圖はそれ等の作品の遺例として最も早きものの一つである。

詩を題せる二人は朱熹の門人として知られてゐる。考亭淵源錄卷二十鍾唐傑の條

鍾唐傑、宜春、萍陽人

寶從周、字文卿、丹陽人、志尙冲雅、不伍流俗、既厭科舉業、日讀周易程氏傳・語孟精義・程氏遺書・近思錄、如是者十年、淳熙丙午、年已五十、偕弟澄往見朱子於建陽、及歸築室、專以爲己爲學者倡、士友慕之

詩は

上人海東秀 才華衆推優 學道慕中國 於焉一來遊 武林忽相遇 鍼芥意頗投 儒道雖云異 詩酒喜共酬 況茲古名郡 佳麗罕與儔 湖山快吟覽 勝跡恆追求 合併惜未久 又理東歸舟 揚颿渡鯨浪 帖々如安流 殷勤不忍別 纔纔難爲留 臨風極遐睇 目斷扶桑陬 他時托芳字 還能寄余不

鍾唐傑

榜人理行轡 日出江水平 扶桑渺何許 萬里浮滄溟 上人國之彥 夙悟最上乘 慕此中華風 一錫事游行 名山與奧谷 足跡已徧經 曰予處闍闔 幸矣識韓荆 論詩坐終日 問法天花零 相得臭味同 藹々芝蘭馨 豈比錢刀徒 市利紛以營 去々須臾間 何以展我情 江草色萋々 江花亦冥々 浮雲聚復散 不能常合併

寶從周

共に相識れる日本僧の歸朝に際して別離の情を述べたものである。

圖は水邊に亭を置き、傍に數人が水上遙かに帆を揚げつゝある船に向つて別離を惜む狀を示す。船尾に近く之に答へてゐるのは日本僧であらう。款識はない。

この圖は決して技巧的な繪ではない。宋代に山水畫論が最も盛であり、構想や筆致の苦心が特に尊重されてゐたことを思へば、題材の扱方や線の抑揚にむしろ遠慮勝なこの繪は、云はゞ時代の代表的な藝術の風潮からは遠ざかつてゐる作者の手に成つたことを思はせる。葉の多き松樹、平行線的な土坡、船とそれを取巻いて奔騰する波などの描法さへも恐らく作者の意匠ではなくて當時の最も普通な形式をそのままに用ひてゐるに過ぎないのであらう。それにも拘らずこれ等の事物の形や線は一樣に柔くして謹格なる筆致で忠實に描き出され、形象的な纏りよりも作者の緩みのない氣持によつて統一されてゐる。説明的な遠景が省かれ、二本の松が墨の濃淡によつて劃然と遠近がつけられてゐること、

波の線が多少古風ではあるが筆格の正しいこと、土砂や樹幹の寫實的に確かなことなどは、寫實が宋畫一般の特性であるにしてもなほ作者の目指した處を最も具體的に指摘することのできる點である。全く匠氣を含まない雅正なるその畫風は、この繪が居敬を旨とせる宋學學者の交友の間から生れたものであることを十分に首肯せしめると思ふ。

この圖の描法に關して特に注意すべき事は、故中川忠順氏によれば、圖中の土坡の皴法は大なる脈線の間に小なる脈線を置いて、一種の斧劈法と云ひ得るものであり、松葉は放射狀をなす所謂唐松線の下に暈を用ひてゐて、いづれも南宋畫の一つの特色を示し、かゝる描法の影響の我國に現れたのは淨土五祖繪

傳に始めて見るのであるが、この圖はその製作動機から考へて恐らくこれを我國に傳へた最も早い遺例であることである。

この圖を贈られたる日本僧は、伊藤東涯の蓋簪餘錄以來榮西とする説があり、大日本史料またそれ等の説を擧げて建保三年七月五日榮西示寂の條に榮西に關する史料としてこの圖を掲げてゐる。現在この圖には廣瀬旭莊の文政丁巳仲冬の年紀ある文と同人の手紙一通、篠崎小竹の文等が添へられて同じく榮西たることが述べられてゐる。寶從周は考亭淵源錄によれば淳熙十三年（一一八六）即ち榮西入宋の前年に朱子の門に入つてゐて、榮西の歸朝せる紹熙二年（一一

九一）には五十五歳である。更に「爲人醇朴、深居簡出、足不及城市、年過五十往建陽云々」といふ傳を言葉通りに信ずれば五十歳まで丹陽の地をあまり離れず、また數年朱子に隨從した後も再び故郷に歸つてゐたのであるから、この日本僧との交友は丹陽に於てでなかつたとすれば彼の朱子隨從前後、即ち榮西の再度入宋の頃とするのが適當である。併しながら鍾唐傑の題詩の句「武林忽相遇」「況茲古名郡 佳麗罕與儔 湖山快吟覽 勝跡恆追求」等は日本僧との交友が臨安に初まれることを示し、寶從周の題詩の句「曰予處闔閭 幸矣識韓荊」はこの僧が相當長く臨安に滞在してゐることを思はせる。榮西は再度に入宋に當り臨安から直ちに天台に登り、三年にして天童に移つた後、明州から歸

朝して居り臨安に長く滞在した記録を傳へてゐない。また榮西と朱子學派との學問的な交渉については今日一般に否認されてゐるのであるから、彼の入宋中の動靜を更に明瞭にしない限り、この僧を榮西であると斷定することは暫く躊躇すべきであらう。この送別の場面が臨安であるか明州であるかについても不明である。

かくの如き性質の送行圖が宋代以降一般的な風習であつたことは云ふまでもないが、その圖柄に關して、我國の多くの詩畫軸の例に見、また倪瓚の

二月廿二日、潘子素王叔明來慰藉、臨別爲寫水傍樹林圖並題

岡野石圖筆送行圖

福井利吉郎氏藏 (同氏密贈寫真)

積雨開新霽 汀洲生綠蘋 臨流望遠岫 歸思忽如雲

などに見る如く、直接に送行の場面を描かないものがあるに拘らず、一方に送行圖として一番著しい例と思はれる策彦入明記録類(天龍寺藏)の中の數圖が年代的に非常に隔りつゝ圖柄の點でこの圖と極めて相似てゐるのは興味あることである。陸行の場合は別として、江岸に船を送る場面にそれ程の差異はあり得ないにしても、或は最も普通にほゞ一定した圖柄があつたのではないかと思はせる。

徳川時代に行はれたる送行圖の一例として岡野石圃のもの(福井利吉郎氏藏)がある。石圃が南宗畫派の先輩でありながら畫蹟の少ないことからこの圖は特に注意さるべきものである。畫面には僅かに遠山の峯頭と孤舟の河を下るのを示してゐる。旅行者の姿を偲ぶ意を現すものとして一つの工夫であると思ふ。題詩は

君去春山誰共遊 鳥啼花落水空流
如今送別臨溪水 他日相思來水頭

印は「岡亭之印」「葛天氏之民」である。(渡邊)

註一、熊谷氏論文參照。

二、「朱子語類」等の中に問答がある。寶從周には「中國人名大辭典」は他に盜賊が從周の家たるを知つてそこを去つた逸話を傳へてゐる。

三、印文は何れも不明である。なほそのうち一度剝脱した跡あるものがあり、またこの二人の名前は共に詩と多少墨色が異つてゐる。しかし之はこの二人の名が假託されたのでなく單に書起されたと見て差支へないやうである。

四、この圖の傳來に關しては東涯の畫簪餘錄に或人の藏とし、安政丁巳に内海某の有、ついで篠崎小竹の手に歸し、昭和六年十月鳥尾子爵家の賣立に出でたことが知られてゐる。

五、大正十四年度東大美術史講義「本邦繪卷物研究」。

六、嘉元三年(一三〇五)の奥書あり、鎌倉光明寺藏、國寶全集七一、國華二二五、參照。

七、倪雲林先生詩集卷五。

八、國華四三九送日使小西次忠還國圖、同四八六野泉筆策彦還國圖。

九、古畫備考一一四五頁、屠赤鎖々錄、書畫大觀坤(畫之部)六五、參照。

五、六、當麻曼荼羅圖

兵庫縣 吉田 賴子氏藏

挂幅 絹一幅 着色 堅 一一八・八種 横 一二七・三種

中臺 堅 一〇五・二種 横 八七・五種

今日國寶に指定されてゐる當麻曼荼羅の傳寫本は約十五點を數へる。その他にも根本曼荼羅を始め重要なものは尠くないが、この聆濤閣本は未だ世に知られずして比較的注意すべき一つの例として此處に掲げたのである。

絹の脫落はかなり多く、左右兩縁より中臺にかけて上部五六寸、並に中臺寶池及びその舞樂會は殆んど圖形を判じ難いまでに失はれてゐる。補絹も二三種を下らないが、補筆は僅かに中尊光背の向つて右の一部分に指摘されるのみで、概して古い絹の部分は當初のまゝであると考へられる。賦彩は盛上げ及び綠青、群青系統のものは著しく剝落したが、金箔、金泥、朱、橙等とその上の描起しの線は割によく残り、當初の色調を想像することができる。

佛菩薩は肉身に金泥を用ひ、衣文の線、文様、光背、瓔珞、腕臂釧等に截金を併せ施してゐる。相好は下膨れで眉が一種の曲線をなし、眼の切れ長く、大體鎌倉時代の佛畫の多くと共通してゐる。唯比較的目細くやゝ撫肩の方で、鼻の描方に一種の癖がある。中尊の衣文の色調は剝落のために判じ難いが或る薄き地色の上に一面に截金を以て複線の格子に卍を繋いだらしき文様を残してゐる。觀音、勢至は衣文表に綠青を用ひ、文様の有無並びに衣文裏と裾との色彩は明かでない。華座段の他の菩薩の衣文の色彩の残るものに、朱、群青、橙等が數へられる。隈は殆んど見出さない。注意すべきはこの繪の左半と右半とで畫法を異にすることである。中臺の對稱的な樓閣を見るに左方のものが正確な三手先を寫し、木割の細かいのに對し、右方のものは組物の描寫を略し木割は多少太い。經の要文も左は筆格が正しいのに右は右下りのやゝ樂な書法である、總じて左は筆が利き、右は少し技法が劣ると共に描方も粗略の傾がある。他にも中臺樓閣の後の樹木を右が省いてゐる場合がある如きである。二人の畫家の分業によつて描かれたのであらう。左右の相異の一つとして寶池段相迎會の向つて右の釋迦だけ衣文の線が二重になつてゐる。この線は性質に大差なく、後世の補筆とも思へないのであつて、或は原本を寫し終へた後、この右側の釋迦